

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 141 回 「食育」とは、一体誰のため??

2006 年 3 月 20 日(月)

日曜の朝 7 時半、(健やかな朝のイメージに程遠い顔つきの)竹村健一氏の番組「報道 2001」(フジテレビ) ご存知の方多いと思われるが、実は小生、毎週楽しみに見ている小市民の一人である。もう、少し前に放映されたもので「食育」をテーマにした番組があった。

「食育」とは、健全で豊かな食生活を送るために必要な、「食事の自己管理能力」を養う教育のこと。つまり、子どもたちが自分で自分の健康を守り、健全で豊かな食生活を送るための能力「食事の自己管理能力」を育てようとするものである。今まで教育現場では、「知育」「徳育」「体育」の 3 つの教育が行われてきた。しかし、「食の崩壊」と言われて久しい今日「食教育」の重要性が見直されているようである。

「ばっかり食べ」「マヨラー」「味覚破壊」「個食」「地産地消」「トレーサビリティ」「賞味期限」...「食」に纏わる最近の新造語、果たして幾つ正確にご存知だろうか?

日本人が 1 年間に食べ残す量、約 700 万トンといわれている。これだけ聴くと何ともないが、この数字は世界の食料援助額と同じ、金額に換算すると約 11 兆円に当たり、我国の農業粗生産額にほぼ匹敵するとなると、これは驚き以外何物でもない。

片方で食料自給率の問題がある。地球上に「水」は無尽蔵にあるように思われるが、そのうち人間が飲める「真水」は、たった 3% である。日本も「水」を輸入している事実、ご存知だろうか。日本人の主食といわれた「米」、ですら、現在一番食している「小麦粉」ももちろん、飲食物あらゆる物を輸入に頼っているのが現状である。

現在 40% 前後で推移する我国の自給率の傾向は、年々低下し、先進諸国では極端に低レベルにある。非常に安易な話、年間 700 万トンの食べ残しを完食していれば、この数字は著しく変わるはずである。いかにも「安全」好きな日本の「賞味期限」という制度、よく見ると食産メーカーの企業論理が優先され、本来まだまだ食べられるものも、どんどん再生産させてしまっている、どうも、そんなうがった見方をしてしまう。

現在、世界中で年間約 8 億人の人が餓死を理由に死んでいる。こんなことを考えると、日本の「食育」が、自分達だけの健康、安全志向、あるいは「地産地消」といった「俺が街だけの」経済論理に偏り過ぎて、もっともっと全宇宙的、全地球的観点から生植物の真理、生態、自然の恵みへの感謝を育む姿勢があってもいい、そんなことを思ってしまう。

「もったいない」、小生ですら、今でもたびたび口ずさむ言葉は、現在「死語」になりつつある。決してケチケチ思想である筈がないこの言葉の意味を、現代日本人はもう一度、よく考え直してみることである。700 万トンの食べ残しが、どのくらいの餓死者を救えるか...利益還元付の建前 ODA より、ずっとずっと、重要な問題と言っておこう。